

平安前期の王権と仏教

*ふりがな

こまい たくみ

駒井 匠

本論は、概ね九世紀半ばから十世紀前半の、平安前期における王権と仏教の関係を明らかにせんとするものである。古代中世仏教史研究では世俗権力と仏教の関係は重要な課題として追求されてきた。しかし平安前期については、研究蓄積が少なく、その実態に未解明な点が多いこと、また古代から中世への展開過程が見えづらいという問題があった。本論が扱う平安前期は摂政・関白や太上法皇の登場という王権の変容が見られる時期でもあるため、特に王権との関係を取り上げた。本論では、まず王権の変容と仏教の関係を考察し、加えてその関係が仏教史の展開に如何なる影響を与えたのかを考察することから、当該期における王権と仏教の関係の特質の解明を目指した。

本論では以下のことを明らかにした。第一章では、天皇の天台僧からの受灌頂を取り上げ、それが天皇と摂政・関白の一体性を高めていたことを明らかにした。第二章では宇多上皇の出家を政治史との関係から考察し、それが王権を変容させていこうとする政治的な行為であったことを明らかにした。また第三章では、宇多法皇の受戒と関わり南都の授戒制度が変化したことを明らかにし、宇多の出家が仏教制度にも影響が及んだことを論じた。第四章では、宇多法皇と真言宗の関係に着目して、宇多が真言宗の興隆策を推進し、真言宗を自身の権威を支える基盤としていたことを論じた。真言宗にとっても宇多との関係は自宗の地位の向上にとり重要であり、両者の関係には相互依存が見られることを明らかにした。第二章以下では、宇多と真言宗との関係強化は、藤原氏と天台宗の結び付きが既に見られることを背景とした政治的な選択であったことを述べている。

以上から、王権を構成する核が特定の宗派と結び付いており、王権の変容にとって仏教は不可欠の要素となっていたことが明らかとなった。王権と仏教が不可分な関係を有するようになるが、仏教が王権の変容過程を規定してもいた。一方で王権との関係が仏教史の展開を規定した側面も認められた。特に藤原氏と天台宗の関係強化が見られる貞観年間は王権と仏教史双方の展開を規定しており、画期として位置付けられる可能性がある。これらのことから、王権と仏教が相互に規定し合う関係を見せはじめるのが平安前期という時代であったと結論付けた。